

## ロンドン大学への留学報告

相 田 潤

### Report on the Visiting Research at the University College London

Jun Aida

2010年3月から1年間ロンドン大学疫学公衆衛生学部（Department of Epidemiology and Public Health, University College London）に留学をさせていただきました。大英博物館のすぐそばにキャンパスが点在する大学に存在する、独立した学部の1つです。医学部の中に公衆衛生学講座が存在する日本と異なり、欧米では公衆衛生学部が独立して存在することが多く、そこに在籍する職種も幅広いのが特徴です。保健医療系だけでなく、心理学や、交通事故や街づくりに関する研究者まで、様々な研究者が存在します。健康は、様々な社会環境に左右されるという公衆衛生の核心を表すようなメンバー構成なのではと思いました。

客員研究員としての私の生活は、自分の研究を行うことを中心に、大学院の講義に出席や研究班会議への参加、講演会の聴講、本や論文を読む、といった学問と研究に重きをおいたものでした。その一方で、イギリス人らしい労働時間の元、家族と時間を共にできることも多かったです。

大学院の講義は、大人数で行われる学部共通の疫学や統計の講義、私が師事したDental public

healthのグループによる少人数の歯科公衆衛生の講義の2種類が存在しました。歯科公衆衛生学のコースには、10人ほど学生がいますが、イギリス人がきわめて少なかった（2年目には1人もいなかった）のが印象的でした。ヨーロッパやアジア、中東、中南米やアフリカといった世界中の歯科医師が歯科公衆衛生を学びに来ていました。大学や政府で働いている人や、臨床医をやめて入学した人など様々です。政府から派遣できている歯科医師が国際的に交流する場にもなっていると感じました。派遣できている以外の院生の卒後のキャリアパスは、自国やイギリスに限らず、世界中で就職・就学先を探していました。日本が中心の私としては、驚くとともにその逞しさを見習いたいものだと思います。具体的な歯科公衆衛生の科目としては、Evidence Based Dental Practice、Planning for Better Oral Health、Philosophy and Principles of Dental Public Health、Research Methods in Dental Public Health、Principles and Practice of Oral Health Promotion、Oral Epidemiologyなどがあり、それぞれ複数回の授業がUCLの先生や外部講師の先生により行われます。具体的なヘルスプロモーションの戦略を、それぞれ設定した状況に応じて発表、議論していくような参加型の講義など、興味深いものがありました。

私が幸運だったことに、名誉教授のAubrey Sheiham先生と同じ部屋に机を与えられたことがあります。公私にわたり様々なお話をさせていた

#### 【著者連絡先】

〒980-8575 宮城県仙台市青葉区星陵町4番1号  
東北大学大学院歯学研究科国際歯科保健学分野  
相田 潤  
TEL：022-717-7639 FAX：022-717-7644  
E-mail：aidajun@mail.tains.tohoku.ac.jp

だき、助けていただきました。私自身の研究は、日本でのデータを、歯科公衆衛生や社会疫学の考え方で分析していくものでしたが、まずはSheiham先生に相談して、それからRichard Watt教授、講師のGeorgios Tsakos先生を交えた4人で議論しながら進めていきました。

また、Watt先生らが中心のソーシャルキャピタルと健康の研究班に加えていただけたのも大変貴重な経験でした。Newton教授といったイギリスの歯科の研究者だけでなく、Marmot先生（学部長で、2010年からは公衆衛生分野からは極めて異例だが健康格差や健康の社会的決定要因の研究経歴から、イギリス医師会の会長に就任。）やKawachi先生（Harvard大学の、社会疫学を牽引

する研究者）らも属する研究班で、大変勉強になりました。今はメールでの参加になりますが、今後の展開が楽しみでもあります。

同じ学部で研究や大学院博士課程、研究留学をされていた日本人の研究者との交流も大変有意義なものでした。歯科医師は私だけでしたので、他分野のお話を伺うことは、視野を広げてくれる貴重な機会感謝しております。それに関連して読んだ文献や本は、今後の研究を支えてくれるものだと思います。

こうした留学させていただいた経験を生かして、より専門的な歯科公衆衛生、社会疫学の研究や国際共同研究を進めていけたらと思います。